風潮にあり、「9条改憲」を推し進める勢力によって様ざまな圧力が人びとへのしかかってきています。私は藤岡さんが部隊から脱走し、「1人の人間」へと転換していった、その地点に立ちたいと思っています。一人の命ある者として、人殺しの道具である兵器の廃絶を願い、人殺しの集団である軍隊の廃絶を願うのは当然のことです。幸運にも藤岡さんの話を聞いた者として、このことをできるだけ多くの人に伝えていくつもりです。

＊なお、藤岡さんの戦場体験は中公文庫・藤岡明義著『敗残の記』に記されています。絶版ですが、古書店のインターネット検索や図書館で探すことをお勧めします。また、私の発行する『戦争と性』22号にも藤岡さんのインタビューと『敗残の記』の一部を転載していますので、関心のある方はご連絡ください。

電話・FAX 042-559-6941
メール sensotosei@nifty.com
（にしだ・かずのり『戦争と性』編集発行人）

【お答え】

人を犠牲にしての平和はあり得ない

佐橋　はるな

いきなりぶっちゃけてしまうと、世界の平和よりあたしの平和、だ。あたし1人が犠牲になれば世界が平和になるっていう状況が仮にあったとしても、絶対お断り。本音のとこはみんな似たようなもので、その延長上に「戦争は嫌だけど（あたしが殺されるのも嫌だから、それくらいなら他人を殺す方がましだから）武装は必要」ってのがあるんだと思う。でもそれだと、いっぱい武器持ってる側だけが限定的に平和っぽいだけで、自分がその「武器いっぱい」側にずっといられるかわかんないし、全体としての世界はちっとも平和じゃない。世界が平和じゃないとあたしも平和じゃないわけで。てなとこで「あたし主義非武装論（論ってほどじゃないけど）」をいくつかご紹介。

その1・軍隊は税金ドロボー。あたし公務員なんでこの台詞イタいんだけど。軍隊（自衛隊も軍隊ね）の場合はベラボウに税金を喰うだけじゃなく、戦争が起きなきゃ払った分の元は取れない（元を取る以上に失うものの方が多いし）、ってのがトンデモない。アメリカがしょっちゅう戦争してるのも、リストラされないように軍が圧力かけてるって話。武器だって使ってもらわなきゃ新しいの買ってもらえないから、武器屋さんもけしかける。金と資源と命のムダ使い。戦車買う金あったら、あたしの老後の年金にまわしてよ。

その2・武器は守ってくれない。世界一の軍事力持ってる国だって、自爆テロで民間人が大勢死んだ。武器の性能が上がったって、戦場には生身の兵士が行かされるし、重武装してたって何人も死んでる。武器や軍隊にできるのは「やられたらやり返す」「やられる前にやる」ことで、「守る」ことは守備範囲外。他所の国で拉致られたって、助けに来てもくれない。守ってくれるってんなら、あたしん家に執事を派遣して（ひとり暮らしは家事が行き届かなくて…ダニやゴキからあたしを守って～）。

その3・人殺しなんかしたくない。非体育会系でオタクなあたしでも、子どもの頃は男の子追い回してぶっ叩いたり、数年前も元カレに物投げて八つ当たりしたりしてて、暴力は絶対に振るわない、っていう自信はない。一応男女平等な世の中、あたしも将来徴兵される可能性はある。ハンドル持つと人が変わるように、武器を持つと凶暴になるのが人情（？）。武器なんか持たせないで、あたしもオトコを殺しちゃうかもしれないからっ！

あたしはあたしが大事。他の人にもあたしを大事にしてもらいたいから、あたしもなるべく他の人を大事にする。他の誰かが犠牲になれば世界が平和になるとしても、あたしはその人を犠牲にするのは絶対反対する。だから非武装。だから憲法9条。

（さはし・はるな　学校図書館司書）

連載企画

なぜ絶対非武装か？

その⑤

本誌93号から、「憲法9条による非戦は大切だが、最低限の武力は必要ではないか？」というよく言われる質問に対して、市民の意見30の会・東京として、わかりやすく、説得的に答えるため、この企画を続けてきました。その精神は、今年の意見広告運動が発行した略称『非武装パンフ』にも生きています。今回も、若い人にも答えてもらいました。

【お答え】

軍からの脱走と非武装

谷口　和憲

私は今、『戦争と性』というミニコミ誌を、日本が2度と戦争をしないように（イラク戦争に荷担してしまいましたが…）、また、「慰安婦」制度などの戦時性暴力を行わないようにとの思いで発行しています。

このミニコミ誌を発行する過程で何人かの元日本兵の方がたからお話を伺うことができました。戦場体験は、その人が、いつ、どこで、どのような階級だったかによって異なりますが、私がお話を伺った人たちの多くに共通しているのは、制空権も制海権も奪われた前線に、参謀本部の机上の作戦によって食糧や弾薬の補給もないまま放り込まれたということです。「九死に一生」どころか、ほとんど奇跡的に助かった彼らにとって「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」という憲法9条は、絶望の中の一筋の光、「希望」そのものだったと言います。

そのうちの1人、藤岡明義さんのフィリピン・ホロ島での体験は、米軍の爆撃を逃れてジャングルに入った日本軍が、ジャングル戦を得意とする原住民のイスラム教徒・モロ族に襲撃され、恐怖で逃げまどうというものでした。そのお話の中でも特に印象的なのは、藤岡さんが所属部隊からの脱走を決意するところです。ご存じの通り「脱走」は、即、処刑を意味します。それにもかかわらず、病気を装って行軍から脱落し、ジャングルを何日もかけて抜け出し、白旗を持って米軍に投降したのは、藤岡さんが「日本軍兵士」から「1人の人間」へと転換を遂げたからに他なりません。

戦後、藤岡さんはある機械メーカーの重役でしたが、部下から「最低限の軍隊は必要ではないですか」と訊かれたときに、「どこまでを最低限て言うんや？最低限てなもんはあらへん。軍隊はどこまでもエスカレートして行くんや」と答えたそうです。

藤岡さんは中国戦線とフィリピン戦線で何回か、決定的な生死の分かれ目に遭ったそうですが、例えば、ホロ島のジャングルの中で数メートル先のモロ族に正面から撃たれたときも、弾丸が顔のすぐ横をかすめるなど、まさに奇跡的に助かっています。藤岡さんは「何度考えても不思議なんです。戦場で死んでいった者たちが、戦争について私に語らせるために生かせてくれたのではないかと思うほどです」と言われました。

その藤岡さんも昨年の春、90歳で亡くなられました。今、「非武装」の主張が荒唐無稽な話として鼻でせせら笑われる